

なお生きていることを述べる。第6章は1930年、27期生の実施した四川、陝西、山西3省での調査日誌を取り上げ、各地の軍閥間の抗争の激しいなかで、卒業生たちが現地の地域の特性をどのように捉えたかを説明する。

第7章では調査旅行が本格化した第5期生、1907年以降の調査コース、調査指導方針などがまとめられる。中国側の協力を得て（必要な場合には出先の官庁や軍閥から護衛兵がつけられている）ほとんど中国全土にわたって実施された調査旅行も1931年の満州事変によって、その翌年から中国政府の護照（ビザ）が発給されなくなり、日本軍の勢力下にある地域の調査に限定されるようになる。指導者も経済地理学志向の馬場敏太郎から地政学的立場に立つ小竹文夫に変わり、さらに1941年の専門学校から大学への昇格とともに個々のゼミナールの指導教授が独自の立場で分担指導するようになるなど指導方針にも変更があった。著者はこの間の変化を、模索期、拡大期、円熟期、制約期、消滅期の5つの時期に分けてそれぞれの時代の性格をまとめている。

このように、著者は、現在の愛知大学の所蔵されている東亜同文書院生たちの報告書と旅行日誌を検討して、第二次大戦前の日本では数少ない、組織的な地域調査の全容を本書において明らかにしているのである。著者はこれらの調査旅行について「若く純粋な学生たちの目は、眼前に生起する事象を、観念的でなく新鮮な感覚で把握する。そこには記録者個人の主観が十分入りこんでいるが、この場合、それゆえにより一層記録内容に意味を生ずることになる。また、記録者が単なる旅行者というのではなく、日本人であることから、日本人の視点とフィルターによって中国社会を認識し、把握しようとした点も重要である。当時の日本人の中国に対する視点を随所に見出すことができる。」「特定の町や村だけではなく、広域を踏査することによって、コースに係わる地域全体を認識し、記録したという点も重要である。地域全体のイメージを把握でき、その中で個々の地域や事象を位置づけることが可能になるからである。」（ともにp.240）と評している。また、学生たちの調査によって明らかにされた当時の「歴史的に形成されてきた伝統的空間の枠組みは、将来において交通体系が大幅に整備されるまでは、ほ

とんど変化しないであろう」とし、今日もなお見られるように、「地域経済のベースは、無数のそれも狭小な局地的市場圏の並列から構成されているのであり、それを無視した経済政策は今後もうまく機能しないであろう」（p.241）としている。それは四川盆地や漢中盆地のような中国内陸部における評者の貧しい旅行体験からも首肯できる部分が多く見られるものの、一方ではこれらの地域内である程度まで整備された交通路上の交通量は着実に増加している。急ピッチで進められた内陸部の鉄道建設と線路容量の限界に近い状態で運転されている貨物列車、あるいは一般道路上での定量をはるかに超過した過搭載のトラックや個人営業のマイクロバスなどのひんばんな運行など、戦前には決して見られなかったであろう現代の交通景観を見ると、現代の中国において、人々の行動範囲や商品の流れが飛躍的に拡大しつつあるのも確かである。そしてこのような交通の発達にわたって続くならば、そこに住む人々の考え方や社会の仕組みを着実に変えてゆくに違いない。国が広く、人口も大きいだけに、変化が個々の地域の末端にまで及ぶにはいさか時間がかかるであろうことも確かなのであるが。

東亜同文書院による長期にわたる中国調査旅行とその成果の出版は、近代日本の地理学史のなかでも特筆すべき事象であり、その全容に迫った著者の長年にわたる研究の努力には深い敬意を捧げたい。著者は愛知大学に所蔵されている東亜同文書院卒業生による調査日誌や報告書などを資料として、更なる分析を続けており、多くの成果が今後発表されて、その実態がますます精緻に、かつ多角的、総合的に解明されることを期待したい。

（青木栄一）

溝口常俊著：『日本近世・近代の畑作地域史研究』

名古屋大学出版会 2002年12月

A5判 本文391頁

索引・図表一覧・付表49頁 6,500円

本書の著者は、水田中心史観を批判する立場から、近世以降の畑作地域の実証研究を四半世紀にわたって行ってきた人である。本書はその成果を整理して一冊にまとめただけでなく、水田中心史観批判からもう一歩進んだ著者の今の研究視点を世に問い、その成果の一端を示すために刊行され

た。本書は著者が京都大学に提出した学位論文が骨格になっており、また名古屋大学出版会の審査を経ていたので、記述内容の確かさは証明済みである。ここでは本書の著者の研究視点と結論を紹介し、評者の視座と読後感を述べることにする。

本書は次のように構成されている。

序章

第Ⅰ部 甲州御勅使川扇状地畑作村落の展開過程

第Ⅱ部 焼畑村落の地域的展開

第Ⅲ部 畑作・水田複合の地域像

終章

序章と終章が書き下ろしで、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部には著者の既刊論文11篇が再録されている。序章と終章に著者の研究視点と成果が記述されているので、まずはこの2つを評者が理解できた範囲で紹介したい。

序章では著者の研究視点が4つの段階を踏んで記述されている。

第一に、水田中心史観を批判する立場の研究は2つの部分が十分でなかったと著者は述べる。ひとつは中世以前の畑作研究に比べて近世以降の研究が少ないこと、もうひとつは畑作村落と畑作民の実態が明らかになっていないことである。

第二に、著者は既存の焼畑研究の諸視点を回顧したうえで、近世を含めてそれ以前の焼畑村落の全体像を明らかにすべきであり、これが本書の研究目的のひとつであると述べる。

第三に、著者は田と畑、水田村と畑作村の関わりを日本の歴史の中で位置づける必要があると述べ、近世の農書の記述を引用して、日本では田畑が互いに補いあう関係にあったとしている。

第四に、著者は扱う時代の上限を史料がある江戸時代初期としたうえで、水田中心史観批判のアプローチ法として、時間と空間の両者に注目しつつ、(1)普通の百姓の生業を明らかにする、(2)畑地しかない村落の変遷と村民の生活を描く、(3)畑作村落の構成員である家族と人口の分析を行う、(4)水田村落を含めた地域全体の中で畑作村落の位置づけを行うと述べる。

本書のタイトルの中の、「地域史」は、著者が時間と空間の両方に注目して畑作地域論を展開する姿勢を示す用語である。また著者は、百姓すべてが農民ではなかったので、本書では「農民」ではなく「百姓」と呼び、「農村」ではなく「村落」

と呼ぶと記述している。

終章には本書の結論が記述されている。評者なりに整理すると、本書の結論は次の二点に集約できる。

第一に、著者が事例研究を行ったすべての畑作村が高い人口支持力を持っていたことが明らかになった。畑作の生産性は従来考えられていたほど低くなかったことと、畑作村の人口は農業以外の生業も組み合わせて暮らしていたからである。

第二に、著者は水田中心史観を批判する立場から畑作地域の研究を行ってきたが、結局のところ日本の村落は水田と畑作が組み合わせられて成り立っていることが分かった。また仮に水田だけの村、畑作だけの村があったとしても、両者は互いに補いあう関係にあり、地域の中で見れば、ひとつのシステムの中の構成要素である。

著者は「あとがき」に、本書のタイトルを『畑作・水田複合の地域史研究』としたかったが、研究成果がほとんど畑作村落に限られるので、これをタイトルにすることは断念したと述べている。

本書の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部には、これまで著者が行ってきた実証研究の成果が記載されている。

第Ⅰ部は、近世以降の甲斐国の畑作村の実証研究である。第一～四章では、御勅使川扇状地上の畑作村における百姓家族の変容と商業活動の実態と日常の暮らしぶりを、17世紀後半以降の宗門改帳と地方文書と明治中頃の百姓の日記を使って記述している。次に、甲斐国の通婚圏（第五章）と奉公人の移動圏（第六章）を、宗門改帳を使って明らかにしている。

第Ⅱ部は、甲斐国早川流域（第七章）と飛騨白川郷（第八章）と屋久島（第九章）の焼畑村落について、検地帳類を使って研究した成果であり、近世後半から明治期にかけての焼畑は人口支持力があったことと、村人は焼畑稼ぎと農間稼ぎを組み合わせて暮らしていたことが記述されている。

第Ⅲ部では、畑の比率が高い隠岐（第十章）と、田がかなりの割合を占める尾張（第十一章）において、それぞれ畑作の存在意義を明らかにし、田と畑が互いに補いあう関係にあったことを記述している。著者は日本における今後の地域研究史に大きな意義を持つのが、この第Ⅲ部だと言う。著者によれば、日本の村落は、田畑いずれもある隠岐型か、大半が水田の尾張型のいずれかの

類型に属するからである。

なお、本書には2つの史料が付表として掲載されている。ひとつは第四章の甲斐国巨摩郡西野村の中込源吉日記（明治20年分）の全文翻刻、もうひとつは第九章の屋久島の栗生村と中間村の享保11年の検地名寄帳から作成した世帯構成表である。

次に、評者が本書を読むにあたっての視座と、読後感を述べる。

従来、この種の著者は、著者の歴史観や価値観にもとづいて立論のための史料が選ばれる場合があって、読者は実際とは異なる村の景観や村人の暮らしぶりを描くことが少なくなかった。本書の著者は地域史の視点から畑作研究を行ってきたと言う。そこで評者は、「読者が近世・近代の畑作村の景観を適切に描ける著作か」の視座から、本書を読んだ。

本書の研究目的と実証の方法は、評者なりに十分理解できたので、目からウロコが落ちるほど新しいとは思わないが、著者の研究視点にもとづいて実証作業を重ねる中で得た、一歩進んだ研究視点を世に示したところに本書の意義がある。この書評を読んでおられる方々に、本書の序章と終章は早い時期に熟読することをおすすめしたい。

著者は主に中部地方の畑作村落の土地と人口の歴史を研究して、日本の集落は水田と畑作が組み合わせられ補いあって成り立っているとの考えに至った。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部の諸論文の刊行年を見ると、本書のタイトルならば10年前には刊行できたであろうし、もし刊行していたら著者は畑作地域論をもっと強調する内容の序章と終章を書いていたであろう。しかし、今の著者は水田中心史観への批判熱から醒めて、日本の村落では水田と畑作が組み合わせられ補いあってきたとの考えに至っている。評者は近世農書の営農技術を指標にして、農書が著作された地域に固有の性格と日本のどこでも通用する性格について30年ほど考えてきたが、本書の著者が実証研究を重ねて会得した一歩進んだ研究視点は、評者の日本の営農技術の共通性に関わる部分の考えと一致する。その意味で、本書は「読者が近世・近代の畑作村の景観を適切に描ける著作」である。今ここに本書を刊行したことは、著者の研究視点の進展を読者に知らしめることができよかつた、と、評者は思う。これか

らも今の視点からの業績を積まれて、将来『畑作・水田複合の地域史研究』が刊行されるのを待ちたい。

ちなみに、細かいところで2つ述べてみたい。

第一は、序章の15頁の後半3行で水田村民の日常食を記述する箇所である。これは従来 of 俗説に引きずられたやや安易な記述のように思われる。ここ10年ほど近世と近代の庶民の日常食に関心を持ってきた評者には、「村人の暮らしぶりを適切に描く」という視点から、気になる記述である。食は地域史研究の中でも重要な部分だからである。

第二は、序章の16～19頁に村の生産と暮らしの中で、村人は水田と畑作を組み合わせさせて使ってきたことを、近世農書を用いて述べている箇所についてである。農書の著者の多くは為政者と村人たちの間に位置する階層の人々、いわば社長と平社員たちに挟まれて神経をすり減らす中間管理職の人々であった。彼らは、米を多く収穫できる技術が普及するだけでよい為政者と、田と畑の生態環境を維持向上させつつ食料事情が好転する技術を修得したい村人たちの欲求を同時に満たすために、農書を書いた。畑作物は米を作る百姓たちの夫食ふじきになるという説明をすれば為政者に申しわけが立つし、華北の乾燥地農法の系譜を引く中国の農書には畑作物の耕作技術が長々と記述されていることも幸いした。したがって、農書を編集するための情報を集めた地域の田畑の割合の多少に関わりなく、多くの農書は水稲と畑作物のいずれも耕作技術を記述しているのである。村で暮らす人々にとって、田と畑は、個々の輪作や相互の輪換など、様々に組み合わせられて農耕する場であった。本書の補いとして、老婆心ながらここに記述する。

本書には著者の四半世紀にわたる研究視点の動きと研究成果が、本文だけでも400頁近い量で記述されているが、評者は序章と終章しか熟読していない。刻々と変わる今のデータを使って地域性を明らかにする分野とは違って、歴史地理学の研究成果は時を経ても腐らない。評者はこれから時間をかけて本書の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ部を読んで、近世・近代の畑作村落と水田畑作複合村落の景観をじっくり味わいたいと思っている。今回は中途半端な読み方で書評したことを著者にあやまりたい。

（有菌正一郎）